

≡書 評≡

川田稔著『柳田国男の思想史的研究』

藤 井 隆 至

(1)

読書感想文的な柳田国男論が多い中で、珍しく本格的な柳田国男論が刊行された。書名は『柳田国男の思想史的研究』、著者は川田稔氏である。氏の専攻は政治学ということであるが、繙読すれば知られるとおり、経済学と経済思想史についての深い学殖にも裏打ちされている。

本書所収の論文は、いずれも著者の所属機関の紀要に掲載されてきたものばかりである。地味だが、堅実な学風が彷彿としてこよう。各論文の構成は、以下のとおりである。

第1編 初期柳田

- 第1章 初期柳田における農政論の構造
- 第2章 初期柳田における地域論の特質
- 第3章 初期柳田の民間信仰論

第2編 大正末一昭和初期の柳田国男

- 第4章 柳田国男の地域改革構想
- 第5章 柳田国男における政治論の特質
- 第6章 柳田民俗学的方法的一側面
- 第7章 柳田国男における共同性の問題

それぞれ個別の機会に発表された論文ではあるけれども、その後若干の加筆修正をおこなっていることもあって、全体としてはゆるやかな体系性をもつことになっている。「第1編 初期柳田」と「第2編 大正末一昭和初期の柳田国男」に分かつ構成の仕方からして、第1編では日露戦争前後から第一次大戦ぐらいまでを、第2編では第一次大戦後から昭和恐慌期ぐらいまでを、対象にしている。

この区分の仕方は著者独自のもので、通説では1910年の『遠野物語』をもって柳田が一つの思想的な飛躍をおこなったと解されているから、上述のような著者の時期区分の仕方には通説に対する批判が込められていることを意味するのであろう。この点についての説明のないのが惜しまれる。

(2)

7本の論文の中では、「初期柳田における農政論の構造」と「初期柳田の民間信仰論」「柳田国男の地域改革構想」の3本がとりわけ力作であるように見受けられた。本書評でははじめの2本を組上にのせることにしたい。

デビュー作でもある「初期柳田における農政論の構造」は、いわゆる柳田農政学を対象に、その所論を簡明に整理した論文である。

著者によれば、柳田は「日本の国民的国家的自立の観点から当時の国民経済の内包する問題性が農業の低位性にある」と判断しており、その原因は「日本農業における経営規模の矮小性、零細耕地片の分散錯綜、米納高額小作料、小作人の耕作権の不安定性」にあるとみていた。この点を打開するために、自立的小農経営の育成確立という「直接生産者たる農民の利害を擁護する方向」で改革を構想するが、それは生産力を増大させるためであったと著者はいう（引用はいずれも75ページ）。

とりわけ著者が強調するものは、柳田農政学がもつ生産力的な性格である。柳田農政学が生産力的な性格も持っているという点は評者も同意見であるが、その論証の仕方には抵抗を感じないわけにはいかない。

というのも、著者には当時の日本農業が「半封建的」であったという歴史認識が先験的な命題として存在しており、この観点から柳田農政学への読み込みを進めているからである。その結果、柳田国男の農政思想は生産力主義一色で塗りつぶされることになってしまっている。総じて著者は山田盛太郎氏に通じる日本資本主義像を抱いておられるようであるが、その妥当性自体は今も問わないとしても、研究者の歴史観から思想を読み込んでいくという方法的態度は、そのことを強く自覚していないと、周知の方法論上の無理を生じさせることがある。いうまでもなく、プロクルステースのベッドという問題である。

(3)

柳田農政学が生産力的な性格も有していたという理解については評者も同意見である。しかし彼の農政学が生産力論そのものであり、しかもそれが日本農業の「半封建性」に由来していたという主張になると、話は別である。柳田は日本農業の改革を求めたけれども、それは「何故に農民は貧しいのか」という問題意識に答えるためであって、『日本資本主義分析』にいう「日本資本主義の基本構造＝対抗・展望」を示すためではない。『時代と農政』という柳田の書名が端的に物語るように、農民の貧困問題を打開するために彼が想到したものは、「時代の変遷」に即した「農業政策」の必要を政府と農民に訴えかけるといったことであった。「時代の変遷」とは、この場合にあっては、経済社会が自然経済から貨幣経済へ発展段階論的に移りかわっているという同時代認識であり、「農業政策」とは、そのような貨幣経済社会に適した農業経営を創出していくための方策としてであった。彼が求めた改革は、日本農業から自然経済的な要素を払拭させることであった。その自然経済的な要素と半封建性なるものが一致するというのなら、そのことをまえもって証明しておく必要があるであろう。

柳田農政学についての著者の接近態度は相当地に内在的であり、この点については評者も敬意を表するものであるが、そのような内在的分析と研究者の歴史認識による分析とが必ずしもよく噛み合っているわけではない。よく柳田農政学の核心にまで迫りながら、複眼的な方法として生かされることなく、最後の局面では、著者の歴史観によって裁断されてしまうことになってしまっているのである。

(4)

同種の問題点は本書の構成の仕方にも看取される。論文「初期柳田の民間信仰論」は、「初期柳田」の民間信仰研究のうちに国民的な共同倫理の形成の必要性という柳田の問題意識を読みとった秀逸の作品であるが、柳田がなぜ国民的共同倫理の問題を問題としなければならなかったのか、その理由は明示されていない。農政論の行き詰まりからの打開策としてこの局面を問題にしたというのなら評者にも理解可能なのであるが（いわゆる「農政学から民俗学へ」という通説）、本書の編別構成は農政研究も民間信仰研究もともに「初期柳田」として一括してあるので、通説批判を意図したのであろうとは見当がついても、どの点で通説を批判しようとしたのか、肝心のその点を知ることはできない。

著者の編別構成の仕方からただちに連想さ

れるのは、大塚久雄氏の歴史理論の一つ、いわゆる「経済と倫理（エートス）の相関」として歴史のダイナミズムを観る見方である。この場合についていえば、農政学を「経済」に、民間信仰論を「倫理」に相当させようという着想とみられる。だが西洋経済史研究上の成果を柳田国男研究に無媒介的に導入させることは、やや冒険にすぎよう。そもそも、学問の根底にある人間観のところ、両者の間にはかなりの懸隔が存在しているのである。

蛇足ながら追加的に言及すれば、第一次大戦の前と後で柳田国男の思想を区分しようとする試みは、いわゆる国家独占資本主義の時代への移行と絡ませようとしてのことであろう。この区分の仕方が問題なのではなく、この区分を導き出した議論がないという点が問題なのである。柳田国男の思想的な飛躍の時

期を1910年の『遠野物語』にみようとする通説に対して、評者は1908年の九州旅行に画期を求めたいのであるが、著者は1920年ごろを一つの区切りとしておられる。そのような立論がなぜ可能なのか、その理由を評者は思いつくことができない。日本経済史についての公式的な命題の方を優先させたとしか考えられないのである。

(5)

「プロクルステースのベッド」という問題は、ほかならぬ大塚久雄氏がたえずいましめておられたことがらである。もって他山の石としたい。

(未来社、1985年10月、353ページ、4000円)